

薬師寺東塔の調査

—第536次

1 はじめに

国宝薬師寺東塔（以下、東塔と略称）は、薬師寺が平城京へ移された奈良時代から現在まで伝わる薬師寺唯一の建物である。三重塔であるが、各層に裳階と呼ばれる差し掛けの屋根が取り付く、他に例をみない建築様式である。2009年7月から保存修理事業に着手しているが、今回は解体修理である。

発掘前の基壇は、明治時代におこなわれた修理の際に外装が一新され、さらに1952年の修理でも建物外部の敷石の多くを取り替えているが、いずれの際にも本格的な調査はおこなわれていなかった。今回の解体修理に際して、創建当初の基壇の規模や構造、材料などを調査し、基壇外装の旧状の確認および後世の改変履歴をあきらかにし、薬師寺東塔の変遷を解明するため発掘調査をおこなうこととした。加えて、不同沈下が著しい礎石の沈下原因を解明し、修理方法についての検討材料を得ることなども発掘調査の目的とし、奈良県立橿原考古学研究所との合同で2014年7月8日より調査を開始し、2015年4月22日に終了した。なお、現在の基壇外装材および敷石は、写真撮影および図面作成などの記録化をおこなった上ですべて除却し発掘調査をおこなっている。ここでは、2015年2月上旬までにあきらかになった点を以下に列挙する。なお、発掘調査成果の全容については、別途作成する発掘調査概報で公表する予定である。

2 調査成果

主な調査成果は3点である。まず、創建時から現代に至る基壇外装の構造と規模があきらかになった。今回の調査で、東塔の基壇外装は、創建時が切石積基壇（一辺13.3~13.4m）で、中世に乱石積基壇（一辺13.9m）に改修され、近世には西面のみ乱石積基壇の外側へ切石積基壇を追加し、さらに明治修理時に花崗岩の壇正積基壇（一辺14.6~14.7m）へ改装するといった創建以来の変遷が判明した。基壇は、改修の都度外側へ拡張されたため、古い基壇外装が完全に壊されることなく残っていた。

つぎに、創建基壇の版築がほぼ完存することを確認し



図289 第536次調査区全景（北西から）

た点がある。前述のとおり基壇外装は、後世の改変を受けていたが、基壇本体は創建時の姿を良好に保っている。版築にともなう突棒痕跡や礎石据付穴の掘削時とみられる工具痕、加えて創建時と推定される足場穴や杭跡など、東塔の造営に関わる痕跡や遺構を多数検出した。このように創建基壇の残りは良好で、塔造営に関わる情報も数多く得ることができた。このほか、基壇外周で明治修理時の足場穴を検出するなど、東塔修理の履歴についての知見も得られた。

また、裳階柱礎石では、すべてに据え付け直した痕跡が認められ、いずれも明治修理にともなうと考えられる。一方で四天柱礎石や側柱礎石については、多くが創建時のまま動いていないこともあきらかになった。心礎についても現状では動かされた痕跡が認められない。

さいごに、西塔との共通点と相違点とが明白になった点がある。創建時の東塔の基壇は、一辺約13.7mの西塔基壇よりわずかに小さいが、大差ない規模で、高さもほぼ同じである。基壇上面から掘り込む大型の隅丸方形を呈する礎石据付穴や、四面に取り付く階段とその規模なども含め、東塔・西塔の基壇は共通点が多い。したがって東塔と西塔とは、基本的に同一規模・構造で設計され、共通した構築技術を用いて建立されたと考えられる。

一方、東塔の心礎は、柱座や舍利孔が確認されず、西塔と異なる石材の不定型な礎石である。また階段は、踏石・地覆石とも凝灰岩の切石で、ともに花崗岩を使用した西塔と異なる。さらに基壇外装地覆石は、こちらも花崗岩で統一された西塔に対し、東塔では複数の種類の石材を使用し、厚さも不均一である。さらに地覆石自体も上面の彫り込みが浅く、南辺では彫り込みすらもないといった違いがある。このように東塔は、基壇外装などの細部に西塔と異なる特徴を有することもあきらかとなった。

（青木 敬、米川裕司・佐々木芽衣／榎考研）